

文学部唯野教授

筒井康隆



岩波書店

文学部唯野教授

筒井康隆

岩波書店

文学部唯野教授

一九九〇年一月二六日 第一刷発行 ©
一九九〇年三月二六日 第四刷発行

定価一三〇〇円

(本体二二六二円)

著者 筒井 康隆

発行者 緑川 亨

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二五五

発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三・六五四二二
振替 東京六二六四〇

印刷・凸版印刷 製本・三水舎

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-002015-3

目 次

第一講	印象批評	3
第二講	ニュー・クリティシズム 新批評	37
第三講	ロシア・フォルマリズム	71
第四講	現象学	105
第五講	解釈学	137
第六講	受容理論	171
第七講	記号論	205
第八講	構造主義	239
第九講	ポスト構造主義	271

文学部唯野教授

第一講
印象批評

大学の講義は十二分遅れて始まり十二分早く終るのが常識とされている。これをだいたい正確に守れぬような教授は学生から教授として扱ってもらえない。だから唯野も正確に十二分早く「比較文学論」の講義を終え、四十九号館の七百二十六番教室から廊下へ出た。新学期になって最初の講義だ。もちろんノートは助教授時代以来五年越しの使いまわしである。

「唯野先生」講義が終るのを待っていたらしく、廊下の壁に密着して立っていた仏文学科の雑務助手⁽¹⁾である幕目が、おどおどと声をかけてきた。やや間のびした顔だがハリソン・フォードに似ていなくもない。「ええと、ちょっとお話が、あの、もちろん、ここで立ってお話してもいいわけなんです」

「できれば誰にも聞かれたくない。いいでしょ。ぼくの研究室へ行きましょ。同じことなら秘密めかしたお喋りの方が刺激的だからね。保守的と言われようが何と言われようが、その方が言語ゲームを聖化します。ヴィトゲンシュタインもそう言ってるしね」

唯野は自分より背が二十五センチ高い幕目と共に学生の大群に混り、広い廊下を歩き、幅のある中央階段を下り、だだっ広い校庭に出た。「まるで学園ものの映画のエキストラの如く個性がなくて大学生らしくない大学生が群れている」。

「この蛆虫のような学生どもはいったい何を考えてるのかね。ひとりひとりは屑みたいな脳しか持っていないみたいだし、きつと集団思考やつとるのだろうね。だいたい文学部へこんなにくさ

(1) 雑務助手 正式な名称ではなく、研究助手(後出)と対応する揶揄的な名称。学生や教授連中の事務処理、身辺雑務ばかりして、あまり研究しない助手のこと。そのため教授連のお覚えがめでたく、学生課のうけもよく、出世は研究助手よりも早いといわれている。

ん、何を教わりにくるんだい。文学なんてものは存在しないだよね。あのう、これが文学だと認められたものの集合体、という意味でも、ある内在的特性があるからというので認知されたものという意味でも、文学なんて存在しないんだよね。だから当然この虫けらどもは、何を教わっていいかわからずにここへ来てるわけで、言ってみりゃこいつら、文学なんてどうでもいいんだよね」

「はあ」いつもの如く臺目は困った表情をして見せるだけだ。賛成反対肯定否定同調反撥どっちつかず、いかなるあいの手も唯野の饒舌をとどめることはできず、火に油を注ぐだけである。

「歩く饒舌」と噂されている火のついたような唯野のおしゃべりと臺目の沈黙が仲よく並んで文学部の建物の四階にある唯野の研究室の前までやってくると、ひっそりとした廊下の片側に、壁の方を向いたままひとりの女子学生がしゃがみこんでいた。

「お女中お女中」唯野が声をかける。「いかが召された」

「はいあの、持病の癩が」

「国文科の学生らしい」唯野は臺目とうなずきあう。

彼女は今までうすぐらさの中にひっそりとしやがみこんで文庫本を読んでいたのだった。文庫本にはカバーがかけてあり、表紙は見えない。

「おれに用かい」

立ちあがった彼女は、女子学生としては珍らしく真紅のスーツなどを着こなしている。一瞬彼

女の眼が金色に光ったように見え、こんな美人が文学部にいたかと思い、唯野はこころもちのけぞった。

「はい。でも、また、あとでお邪魔しますので」藝目がいるためであらう。彼女は一礼して歩み去ろうとした。「ごめんください」

「待ちなさいよ。君みたいなその、ほとんど絶望的なぐらいに透明な美人ちゃんが、内密の相談っていうんだったら、これはもう条件反射的に正確な反応なんだけど、こんな男の用事なんかあとまわしにしたっていいんだよ」

美人ちゃんは苦笑し、うなずいた。「やっぱ、あとで」

おれの研究室を訪れるための一九三〇年代型ドレス・アップであつたのだろうか。自分と同じほどの背丈の彼女が去っていく姿を恨めしげにちよつと見送ってから、唯野は研究室のドアをあけた。「理不尽ってことは百も承知だけどね、あんな美人ちゃんの前だというのに、自分より背の高いものが横に立っているってのは実にむかつ腹の立つもんだね。おれ、あんたといるといつもロートレックの気分」

「申しわけありません。これでもできるだけ首を縮めておりましたのですが」

研究室は四坪、奥が校庭に面した窓であり、両側の壁は本棚である。デスクは窓ぎわ、ドアの横には冷蔵庫がある。

藝目は室内を無遠慮に見まわした。「まだ、ソファが入っていませんね」

「教授になったばかりだもんね。それでも二人部屋を割当てられるよりはましさ。ソファなんかあってみなさい。さつきみたいな美人ちゃんが入ってくればいい手を出していつ果てるとも知れぬ快楽に身を委ねようかなんて気になります。そうでなくてさえあのソファってやつは欲求不満でニューロティックになった男子学生に嫉妬妄想を起させるんだよね。教授VS女子大生の研究室での醜聞ってのはたいいそうした男子学生のフォーカス・フライデーの妄想から発生するの。女子学生の方はソファがあつたつてわりと平気なんだけだね。あのさあ、史学科の飯沼さん、史学雑誌の編集で徹夜が多いとか言つて、勝手にソファ持ち出して、かわりにベッド運び込んだでしよ。言つとくけど、あれきつとまずいことになりますよ。だいたいこの消費社会における階級制度に神経質な女子学生が、文学部の男子学生なんかに興味持つ筈がありません。だから奴ら男子学生はもう、連帯して苛立ってます。裏ビデオ的なドラマ想像してよからぬ噂を言いふらします。飯沼さん、ローレンス・オリヴィエみたいな二枚目だしさ。だからその相手役として想像できる女性かというと、おニャン子タレントで言えば」

「実は、その」と、藝目がきりだす。抛つておくと唯野の饒舌は逸脱を重ねはじめ、世界を無化する域にまで達することを藝目は知っていた。「フランスへ行かれた牧口さんのことなんですが」「行つてからもう三カ月になるねえ。下手なフランス語駆使して、イザベル・アジャニーみたいな感じの可愛いパリジェンヌを口説いとるんでしょうか。いや羨やましいことです。あいつもジャン・ピエール・レオに似た二枚目だし」

唯野が喋り続けている間に解説が挿入される。たいていの大学では、講師になって三年経ていれば誰でも外遊させてくれる。半年、一年、二年と、期間はさまざまだが、それに応じて大学が金を出してくれる。一応は帰国後、研究成果についてのレポートを提出しなければならないが、これは原稿用紙最低一枚でよく、内容もなんでもよい。つまり事実上は観光といってもよい外遊なのだ。

藝目は大きく咳ばらいをして唯野を黙らせ、わざとらしく声を低くした。「ところがそのう、わたし、昨夜、渋谷で牧口さんに出会いました」

さすがに唯野は、ほんの少し絶句した。「シャンゼリゼエと間違えて渋谷へ出たんだろ」いったんデスクに向かって腰をおろし、ちよつと考えこんだ唯野は、すぐ立ちあがり、室内を歩きまわった。「あいつ、たしか一年間の費用として、三百万円貰っていた筈だよな」

「そうです」藝目は重おもしくうなずいて言った。「これはわたしの考えですが、牧口さんのお家は資産家ではありません。ですから渡仏の際、余分にご自分のお金をお持ちにはなれなかった苦でして」

「三カ月で使い果たしたっていうのかい」唯野は驚いて藝目を見つめ、すぐにうなずいた。「なるほどありそうなことですよそれは。パリで、もし下宿を見つけようとしなくてずっとリッツなどという豪華ホテルに泊つていようものなら、三百万円などは三カ月どころか一カ月でなくなりま

す。さらにまた異性交遊だの三つ星めぐりだのをやっていたらば」

「道玄坂でお会いして、思わず声をかけようとしたら、つ、と顔をそむけるようになさいます、そのままそくさと人混みの中へその」

「つまりこういうことかい。君は大学に知れたら具合の悪い牧口の弱味を握ってしまったわけだ。もし牧口が帰国していることを大学が知ったとしたら、奴さんは君がご注進に及んだと思って君を恨むだろう。同じ学部の手教授から恨まれたのではこの権力機構の内部での昇進の道は絶たれたも同然だ。そこで牧口のいちばんの友人であるこのおれに、とりなしてくるよう頼みにきた。そう了解していいの」

藝目は身もだえるように上半身をくねらせた。「あの、強^{あなが}ちそうではなくて、その、牧口さんの、学内における立場を心配して」

「いいのいいの。研究より学内政治重要視する人を非難しようってんじゃないんだから。しかもラインの末端にいりや、どうしたってそうなります。おれにだって覚えはあるんだしね。でもさあ、どうして斎木さんとこへ行かなかったの。あのひと学科主任だし、結構牧口を可愛がってるんだよ」

「あのう、斎木さんはちよつと」藝目が女性的にもじもじした。

「あれっ。君、あのご老体、苦手なの。そうか。迫られたのか。いや。無理ありません。エイズって噂だもんね」

「エイズ」藝目がのけぞった。「斎木教授がああ、エイズ。まさか」

「知らなかったの。早治学生新聞の『激ペンです』ってコラム見なかったのか。学生間にまで専らの噂なんだよ。あつ。あれを見てごらん。ちょうど斎木教授のお通りだ」

唯野が窓越しに下を指し、藝目はその横に立って校庭を見おろした。フランス文学科主任教授、瘦身白髪の斎木が講義に出向くため校庭を歩けば、その前方に群れている学生がたちまち左右へ分かれ、斎木教授の行手には広い道ができる。

「ご覧よ。まるでモーゼだね。学生どもは紅海の如く、斎木教授の左右に牆かきとなれり。いやはやわが学園においてセシル・B・デミルのこんなスペクタクルでもって出エジプト記が見られるとは思いませんでした。あのさあ、あのひと、ホモであり尚且つまたSMでもあつてさ、都内文京区某所のナカソタ・マンション二階のサド・マゾ・クラブで感染してきたらしいんだよね。それでもあのひと、今でもまだあそこへ通ってるって話だけど本当かね。あのご老体でもって夜ごと、いまだに鞭を振りふり血イぱっぱやってるんだろうか。恐ろしい話ですよこれは。あれつ。君、顔色悪いけど、大丈夫かい。あのう、一度や二度手籠めにされたぐらいなら心配しなくてもいいよ」

「まだ、そこまでは」藝目は一瞬思いつめたような表情になり、急に自暴自棄の如き笑いかたをした。「一度だけ肩口にかぶりつかれましたが、あのかたが齒槽膿漏でさえなきや大丈夫でしう。あははははははははは」

唯野は慄然とする。「よし。わかった。わかった。気を鎮めなさい。世の中は完全な闇じゃない

んだから。世界は日の出を待っている。よろしい。ぼくが今夜にでも牧口の家へ行ってきたから。ね。君は安心して平常心を取りもどさない。さあ。もうそろそろあの美人ちゃんがやってくるかもしれないから、君はそろそろ捌けて。捌けて」

藝目が退出するとすぐに唯野は、電話で副手に茶を二人分淹れてくるよう命じた。ひと眼見るなり発狂しそうになるほど不細工な顔をした日狩という女性の副手が茶を持ってきた。彼女は泣き腫らした赤い眼をしていた。

「君でも泣くことがあるの」唯野は好奇心からさっそく訊ねる。「誰かに叱られたのかい」

「事務局で叱られてきました」日狩は訴えはじめた。「蟻巣川先生のことです」

蟻巣川というのは英米文学科の主任教授である。

「あの先生、お宅には何十万円もする鯉を飼ってなさるくせに、切手代をケチられるんです。公用の切手をごっそり持って行かれてしまうんです。困ります」

「まずいなあ」親分であるだけに唯野も頭が痛い。蟻巣川教授のけちは有名であった。本来なら金を出すべきゼミのコンパでも、学生の金で吞もうとするものだから、最近では学生がいやがってやめていき、ゼミの人数が激減しているのである。

茶を飲みながら、唯野はそれから約一時間待った。「美人ちゃん」は、やってこなかった。

牧口の家は西武練馬駅の近く、千川通りの裏、そこがまだ板橋区の一部であった頃からの古い人家が密集している一画の一軒家である。唯野が玄関に立ったのはまだ明るい午後の六時頃で

(2)副手 地位としては助手の下の身分であり、助手を補佐して研究室での雑用をする。二年間の契約で研究室に勤務するが、研究業績や教授の覚えがよいと、再契約され、その後、助手に推薦されることもある。

あつたが、玄関には鍵がかかり、どの雨戸もぴたり閉ざされていて、インターホンをいくら押しても応答がなかった。何度も来ているので勝手は知っている。牧口が母親と一緒に住んでいて、ふたりとも留守ということは滅多にないことも知っていた。

「おうい。牧口。おれだよ。唯野唯野。中にいることは知っているぞ。あけろあけろ」玄関のガラス戸をがらがん叩き、唯野はわざと大声で叫んだ。「問答無用だ。牧口さん。電報電報。サラ金の者だ。泥棒出てこい。不義者見つけた。いやあん。あなたあ。入れてよう。許して頂戴よう。入れてったらさあ」

玄関の間に電燈が点き、ガラス戸が開いて、神経を露出させた牧口が青鬼の顔で出てきた。「やい。なんて声出しやがる。近所にまる聞こえじゃないか」

ふたりとも四十歳に近い年齢だが、大学以来の友人なので顔をあわせるとつい乱暴な学生言葉になつてしまふ。

「あけねえからだよ。変な声出して変なこと言わなきゃ、お前、あけねえつもりだったんだろ」

「お袋が心臓病で寝てるんだ。死んだらどうするんだよ」

「そいつは悪かったな」

暗黒の家の中、牧口は唯野を二階の書斎に導いた。書斎といっても学生時代の勉強部屋をそのまま使っていて、これも雨戸を締めきったままであり、雨戸の隙間から燈火が洩れぬよう、電燈の笠には黒い布が巻かれている。

「戦時中の燈火管制じゃないか」

あきれている唯野を、牧口は睨みつけて言った。「藝目のやつが、たれこみやがったな」

「そ。大正解。あのチューバツカみたいに巨大な代物から聞いたの。でも、おれでよかったんだよ。おれは誰にも言わないからね」

「お前という人間は信用するさ。信用できねえのはお前の饒舌だ」

「信用してねえってことじゃないの」唯野は無然とした。

六畳の座敷だが、本棚が多いため実際は四畳半に満たない。座敷の中央に向かいあって尻を据えたふたりは、唯野が大きな黒縁眼鏡の三枚目、牧口が色白痩せ型の二枚目と対極的である。

「あのさ、こういうのって不自然だと思っわけよ」室内を見まわし、唯野は言った。「こういう隠遁生活あと九カ月続いたら、お前気が変になっちまうよ。いつ帰ってきたのか知らないけど、も早すでに我慢辛抱たまんなくなつて渋谷道玄坂の京子ちゃんのマンションへ忍んで行ってるんじゃないの。おれが喋らなくても誰かにはきつと見つかるし、京子ちゃんの線から漏れるってこともあるでしょ。あつ。お前まさか『アルプ』へは行ってないよね。今でもまだあそこへ行くくらい金しかない助教授だっているんだからさあ」

「アルプ」は渋谷の小さなクラブで、ホステスの京子は六年前からの牧口の愛人である。

牧口の眼が細くなった。「おれに自首しろってのかい」

「早い方がいい。楽になるよ」